

長野県植物誌改訂 研究史資料 6: 佐藤邦雄

中村 千賀*・新井 勝利**

長野県内で活躍された植物研究者として、軽井沢・佐久地域を中心に調査をされ、また軽井沢町植物園を整備し、長く園長を務められた佐藤邦雄先生（写真1）を紹介する。本稿をまとめるにあたって軽井沢町の大林博美氏には聞き取り調査にご協力いただき、また同町の今城治子氏には原稿を提供していただいた。東京大学植物標本室のキュレーターの方には、標本の閲覧と撮影について許可をいただいた。ここに記して深く感謝申し上げる。

佐藤邦雄氏（1913-2009）略歴

1913年（大正2年）長野県北佐久郡軽井沢町生まれ。1944年（昭和19年）長野師範学校研究科を修了。佐久地域において中学校の教員を務める。1954年（昭和29年）の春から1年間、東京大学理学部植物学教室の原寛教授のもとに内地留学をし指導を受ける。専攻は植物分類地理学。1958年（昭和33年）以降、南佐久教育会・佐久教育会の植物研究委員会委員長・顧問を歴任する。退職後、1975年（昭和50年）に軽井沢町植物園を開園し、園長・名誉園長を務める。長野県文化財専門委員、軽井沢町文化財専門委員、文化財審議委員を務める。理学博士。2009年（平成21年）逝去（96才）。

佐藤邦雄先生は、1913年に北佐久郡軽井沢町で生まれた。生家では父・祖父ともに西長倉村長を歴任されている。植物に対しては、幼いころから身近でおもちゃ代わりにかまっているうちに、形のおもしろさ、姿の美しさに自然と興味を持つようになったという。旧制中学校時代にはすでに軽井沢町内で植物調査を行っていた。ある年、友人2人と調査のために浅間山に登ったものの、台風による嵐のために山中で足止めされ、避難した岩窟の中で持っていたパンを頼りに数日を過ごし下山すると、行方不明者として新聞に掲載されていたという武勇伝が伝わる。

1944年に長野師範学校研究科を修了し、佐久地域で中学校の教員を務める。常に植物に対する研究



写真1. 植物園内で作業をされる佐藤邦雄先生
（2000年8月撮影、提供 軽井沢町植物園）

意識が高い先生は、戦後間もない1950年に「佐久の植物方言」を出版される。その自序の中で先生は、幼いころから親しんでいた植物の方言名と和名を対応させるため、また方言にはその語源にまつわる植物の特徴（食用、農耕作の支障、有毒、特異な形態など）に昔の人の生活や習性が反映されていて重要なものであり、記録として残すために出版したと記している。なおこの著書の序文を東京大学の牧野富太郎博士（1862-1957）が寄せており、自序にはまた「（牧野先生から）常に助言と激励を与えられ」とあることから、この頃すでに中央の研究者と親交が深かったことがわかる。

1954年の4月から1年間、東京大学理学部植物学教室に内地留学を果たし、軽井沢の植物に造詣の深い原寛教授（当時助教授、1911-1986）に師事、植物分類地理学を専攻される。その後、原教授の主宰で始まった東京大学のヒマラヤ植物調査で収集された植物の栽培の依頼を受けることになり、きめ細やかな手入れと日々の観察をすすめ、原教授の研究を支援された。この間、原教授から植物について様々な教えを受けたそうである。原教授をはじめとする東京大学植物学教室の教員や学生、植物標本室の職員らとは、この後も長く親交を温められている。

留学後、1958年に所属する南佐久教育会で植物研究委員会が立ち上がり、委員長に抜擢される。第1回調査は原教授の指導のもとに御座山で行われた。4年後の1962年に南北両佐久の教育会が統合されて佐久教育会となった後も、委員会の委員長、

* 長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野県長野市戸隠栃原 3400

** 軽井沢町植物園 〒389-0113 長野県北佐久郡軽井沢町大字登地 1166

さらに顧問を務め、長く佐久地域の植物研究をけん引された。野外調査には学校の休業日が充てられたが、230日ほどに及んだという。標本作成はすべて佐藤先生が行い、植物種1種につき必ず2点作成し、1点は東大に同定用に送り、1点は「郡の基準標本」として整理されたそうである。この調査の成果は1975年に「信州佐久の植物」としてまとめられた。郡内の植物目録だけでなく、食用、薬用、染料、また年中行事への利用や方言などの民俗についての項目、また植物研究者や研究史など歴史の項目も詳しく、それらの多くを先生が執筆されている。

佐藤先生の野外調査の成果は新種や新品種の発見にも表れている。先生が採集された植物標本が基準標本となっている植物は、次の3種が挙げられる。カルイザワツリスゲ *Carex kunioi* T. Koyama: Holotype (TI). Nagano (Shinano), Karuizawa, Mt. Kabutoyama. [11061] (TIO0010137), [12 Jun. 1954] (写真2. 種小名 *kunioi* は佐藤先生への献名。なお現在はクジュウツリスゲ *Carex kujuzana* Ohwi のシノニムとされている)

ミョウギイワザクラ *Primula reinii* Franch. & Sav. var. *myogiensis* H. Hara: Holotype (TI). Gumma, Mt. Myogi. [14 May. 1954] (現在はミョウギコザクラを標準和名としている)

フシグロセンノウの白花品種シロガネセンノウ *Lychnis miqueliana* Rohrbach forma *argyrata* Mizushima: Holotype (TI). Nagano, Karuizawa-machi, Hanare-yama. [2 Sep. 1954]

また、佐藤先生は国内の分布上貴重な植物群落を見出している。1955年にハナヒョウタンボク *Lonicera maackii* (Rupr.) Maxim. (写真3) が軽井沢に生育していることを確認し、大陸との隔離分布の代表として「長倉のハナヒョウタンボク群落」の長野県天然記念物指定(昭和35年)に対して、長野県文化財専門員として尽力されている。また、1962年には大町市の居谷里湿原でハナノキ *Acer pycnanthum* K.Koch を発見しているが、これは当時北限とされていた岐阜県東白川から100kmも離れた場所であった。他に1959年には南佐久郡八千穂村(現佐久穂町)でタチゲヒカゲミズ *Parientaria micrantha* Ledeb. var. *coreana* (Nakai) H. Hara を、1977年には軽井沢町でエゾオオヤマハコベ *Stellaria radians* L. を確認されている。これらの成果は原教授や、留学していた当時から交流のあった小山鐵夫博士などにより専門誌に報告された。こうした研究業績によって、後年理学博士の学位を得ら



写真2. カルイザワツリスゲ (提供 軽井沢町植物園)



写真3. ハナヒョウタンボク (提供 軽井沢町植物園)

れている。

定年により教員を退職され、「軽井沢の植物」(原寛・黒沢幸子と共著、1974)、「信州佐久の植物」(1975)の大著を上梓された直後、先生はすぐに次の大きな事業に取り掛かれた。生まれ育った軽井沢に植物園をつくることである。失われていく郷里の植物の保存をかねてから希望されていた先生は、1975年4月、軽井沢町の協力を得て植物園の造成を始めた。観察路を整備し、草木の搬入・植え込みを続けながらの開園となった。始めに植栽をしたのは、先生が長年をかけて様々な種や品種の収集に努め、自宅の敷地に植栽しておいた植物であった。その後、東大の諸先生をはじめ多くの支援者によって植物が寄贈され、園の規模は大きくなっていった。開園当時、植物園の敷地は約10,000㎡だったが、

8年後の1983年には現在と同じ20,000㎡の広さとなり、145科約1300種(変種・品種含む)が植栽されていた(現在約1600種、写真4)。

開園当初から植物園に通い、佐藤先生との親交の深い軽井沢町在住の大林博美氏は、先生は植物園が開園された後は園の整備や来園者への対応を第一にされ、野外へでかけることはほとんどなかったと話す。大林氏が浅間山などで採集をした植物について、和名をはじめとして、町内外での分布など丁寧に解説をされるのが常であった。特に軽井沢の各植物種の由来について関心が高く、日本の植物の由来をヒマラヤや中国で研究されていた恩師、原教授の影響が大きかったようである。先生が軽井沢で確認された大陸との隔離分布種であるハナヒョウタンボクは、先生の思い入れが強い植物であった。また分布の限られるカルイザワテンナンショウ *Arisaema sinanoense* Nakai (ヤマトテンナンショウ *Arisaema longilaminum* Nakai のシノニム) も好まれていた。

軽井沢の自然をこよなく愛されていた佐藤先生は、失われていく環境の代表として草原を挙げていた。軽井沢駅から南下する道沿いは、かつてはサクラソウ *Primula sieboldii* E.Morren の一大群生地、小さいころから先生の遊び場だったそうである。「原先生が調査をされていた時代には、そこを100m歩くうちに5種の新種を見つけられたそうだが、現在は在来種を5種見つけるのが難しい」と晩年に語っていた。今では希少になってしまった種を植物園内に残すだけでなく、軽井沢の100年先の未来のために、草原の環境を残したいと話されていた。

佐藤先生の最初の著書「佐久の植物方言」(1950)には、当時先生が勤めていた軽井沢中学校の校長の序文が寄せられおり、「佐藤君は、物静かなまじめな教育者である。」と書き出している。気軽で「ずく」があるが、遠慮深い人で、本の出版も同僚の先生が無理にすすめたという。そして最後に「地味で遠慮深い本が、佐藤君そのままの姿で世の中にでることになった」と述べている。青年時代からそうに語られていた先生であるが、現在、先生と交流のあったほとんどのかたが、先生について同じく「遠慮深く、腰の低い人かた」、また「いつもにこにこされていて、優しい人かた」と話す。先生の90歳の誕生祝が、先生が遠慮されることを予想して本人に秘密で企画されたが、当日、会場の旧軽井沢のホテルにお連れし、中で東大の大場秀章教授がすでに待たれていると伝えても、恐縮した先生は玄関から中になかなか入られなかった。



写真4. 軽井沢町植物園入り口
(提供 軽井沢町植物園)

周りの人に対してはこのように遠慮深い先生であったが、郷里の自然に対する思いは誰よりも強く、そのような先生が自ら汗を流して作られた植物園であるからこそ、植物や先生を慕う全国のファンに今も愛されているのだろう。本稿の最後に、軽井沢町の植物の保全活動で先生からご恩を受けた、軽井沢サクラソウ会議の今城治子氏と、筆者の一人で軽井沢町植物園の現園長である新井勝利による、先生についての思い出を掲載する。

佐藤邦雄先生のご恩

軽井沢サクラソウ会議 今城治子

佐藤先生とのご縁は、軽井沢町植物園で始まりまりました。ベージュ色のつなぎの作業着姿で、来園者にいつもニコニコ笑って話しかけてくださる姿が、今でも目に浮かびます。

1990年頃から、「長野県景観サポーター」というボランティア活動をする中で仲間数人と、新幹線工事のできた空き地に軽井沢にふさわしい植物を植えようと話し合い、佐藤先生にご相談すると、「それはいい!」とたいへん喜んでくださりました。前例がないと渋っていた軽井沢町を1年かけて説得し、やっと1998年「われもこうの会」を設立しました。佐藤先生は、植物園の植物のたねや苗をたくさん分けてくださいました。おかげで、瓦礫が軽トラック1杯分も埋まっていた空き地に、アサミスゲや、オミナエシなどの野草がそだち、住民が在来植物の世話をするボランティア団体ができ、現在でも活発に活動しています。

1999年春、「盗掘が激しいから自生地のサクラソウを、欲しい人に全部分けてしまおう」という地

主さんのご意向が伝わってきました。私はびっくりして、昔の自生地のようにすご存じの佐藤先生にお願いして、新井先生（現町植物園園長）と三人で一緒に現地を見に行きました。ところが、4日前には木漏れ日の下で、あちらこちらに咲いていたサクラソウ群落が、全く無いではありませんか。ショックでした。推定で1000株ほどのサクラソウが忽然と姿を消してしまっていたのです。1週間後、気を取り直して、鷲谷いづみ先生の『サクラソウの目』（1998）を読み、「生物多様性」という言葉を初めて知り、2000年冬には「軽井沢サクラソウ会議」というボランティア団体を創り、町花サクラソウをシンボルとして町の生物多様性を保全しようという活動を開始し、現在も続けております。

軽井沢サクラソウ会議のメンバーには町外からの移住者が多く、かつての軽井沢の自然や暮らしを知らないのではないかという意見があり、2004年から地域の住民に昔の花や暮らしのようすを聞き取る活動を始めました。その時も、佐藤先生にご相談し、地域のお年寄りで花や植物に関心のある方を何人も紹介していただきました。先生のご紹介のおかげで『もう一度見たい！軽井沢の草原・湿原』（2005）という本をつくることができました。お年寄りの聞き取りをする中で、軽井沢町には広大な「半自然草原」が広がっていたことを、私は初めて知りました。2005年ごろ、ある別荘開発予定地の湿地に絶滅危惧種があるというので先生に見ていただいたところ、現地に町内でも大変貴重なハナヒョウタンボクの若木が多数あると教えてくださったのも佐藤先生です。

佐藤先生は、単に植物研究だけでなく、学校の先生として植物好きな町民を増やし、全国でも珍しい町立の植物園を開設し、佐久植物方言の収集もしてくださいました。また、東大の原寛博士と共に『軽井沢の植物』（1974）・『軽井沢町誌 自然編』（1987）で、軽井沢町の植物フローラという財産を遺してくださったことも、佐藤先生の大きな功績です。一つの町でこんなに植物の基礎資料が充実している町はないのではないのでしょうか。町の「名誉町民」になっていただくのがスジだと、私は個人的には思っております。

あるとき佐藤先生に「どうして植物がお好きになったのですか」とお聞きしました。先生はニコニコして、「昔はオモチャなんてなくて、その代わりどこにでも花がたくさんあったから好きになったんだよ。」とおっしゃいました。今の軽井沢の子ど

もたちにもそんな暮らしをさせてあげたいものです・・・。

佐藤先生との思い出

軽井沢町植物園 新井勝利

佐藤先生と初めてお会いしたのは、長野オリンピック前年の1997年のことだったと記憶しています。先生が園長を務める軽井沢町植物園の勤務をその年の4月に拝命した時が最初で、以来10数年に亘りご指導をいただきました。軽井沢の植物のこと、植物園のこと、そして東京大学の原寛教授との交流や多くの先生方とのエピソードもお聞きすることが出来ました。お蔭で、軽井沢という初めての土地でも、軽井沢が身近に感じられました。軽井沢の植物について、生育地やその状況、栽培に関することなど、まだまだ教えていただきたいのですが残念でなりません。

1974年発行の原寛教授、黒沢幸子博士との共著「軽井沢の植物」の中で、軽井沢の植物の現状について次のような記述があります。「しかし最近宅地造成とゴルフ場の新設が急速に進み、本州中部では稀に見るこの美しい自然も無残に破壊されつつある。5月には軽井沢駅近くの原野を紅紫に染めたサクラソウの大群落も、盛夏にススキの葉蔭に咲き乱れたキキョウの花も、今は一本を見出すことさえ難しい有様である。本州では軽井沢だけにしか産しない学術上極めて貴重な植物も絶滅に瀕している」。以前から、次第に失われていく軽井沢の植物の将来を憂えていた先生は、こうした植物の保全を図る方策として、軽井沢の植物を集中的に栽培管理する植物園の設立に努め、1975年、軽井沢町植物園の誕生をみました。

軽井沢町植物園には、設立当初より原寛教授や教授の大学の先輩である亘理俊次博士等が、たびたび植物園に先生を訪ねられ、交流を深められました。ほかにも、地域の植物研究者や愛好家、植物写真家など多くの方が繰り返し先生を訪ねられ、交流を深められました。こうした方々との交流は今日もつづいています。

天皇皇后両陛下（当時）が軽井沢町植物園を訪問された2003年8月26日、佐藤先生は植物のご説明役を務められました。両陛下とは、皇太子殿下・妃殿下の時代から交流はありましたが、今回は天皇陛下としてお迎えするというので、先生以下植物園職員はおおいにはりきって園内の整備をすすめま

した。当時、先生は足を痛めておられ杖を使いながら保全作業などにあたられていましたが、ご訪問の予定を知り、その回復に努め、当日のご説明は杖をつかず務められました。

先生は、植物園長の職を辞し、名誉園長になられてからもほとんど毎日のように植物園に通われ、植物園内に植栽する希少な植物等の保存に努められました。保全活動のかたわら、利用者さまへの案内や説明は、ほぼ毎日おこなわれていました。たとえば自身の忙しい仕事があっても、そのようなそぶりは一切見せず、丁寧に案内や説明をなされていました。今も、植物園の利用者の多くの方が繰り返し訪れて下さるお客様ですが、先生のお人柄が、こうした利用を支えていると思います。先生の学問的成果とは別に、称賛すべきことと信じます。

先生は、植物園の設立には大変なご苦勞をなされました。その苦勞も懐かしい思い出に転じていたのかもしれませんが、時折、当時の様子を懐かしむようにいろいろとお話してくださいました。

別の話になりますが、町内の植物調査に複数の方と出かけた時のことです。当時、先生は90歳前後であったと記憶しています。参加者は、先生とは親と子、もしくは孫ほど年齢が離れていましたが、歩き始めてから数時間たったころには、周りの人が少しばて気味になっていましたが、先生ははじめから少しの休みもなく、変わらぬ歩調で終始、様々な植物に注意を払いながら、斜面を駆け上られたりしながら歩を進めておられました。そして、興味深い植物を見つけると、笑顔で話しかけられる先生のお姿が今も印象に残っています。

普段もそうですが、先生は雨の日でも率先してカッパをまとい作業に赴き、また別の日には圃場整備のため大きな重い石も率先して運び上げ一輪車に乗せて運び出す、寒い冬の日も暑い夏の日も変わらず。それでも先生は決して疲れたとはおっしゃられませんでした。後年、以前のようにさっそうと歩を進めることが難しくなれば、ときに片足が思うように動かないときも、決して痛いとはおっしゃられませんでした。そこには植物園への真摯なお姿がありました。先生は、最後まで植物園を愛され、不肖の私と一緒に植物園の将来を考えてくださいました。2008年10月19日に植物園でいつものように植物の保全作業に当たられたのが、植物園を訪れた最後となってしまいました。

本稿を書くにあたり以下の文献と佐藤先生の著書

等を参考にした。

Hara H. 1955. Critical notes on some type specimens of East Asiatic plants in foreign herbaria (6). J. Jpn. Bot. 30: 321-327

原寛 1960. タチゲヒカゲミズ. 植物研究雑誌 35: 211

原寛 1978. 高等植物分布資料 96 エゾオオヤマハコベ. 植物研究雑誌 53: 19

原寛博士記念事業会編 1987. 原寛博士追悼の記. 八坂書房

軽井沢町教育委員会 1990. 軽井沢町の指定文化財(改訂版). 信毎書籍印刷

軽井沢町・軽井沢町教育委員会 1999. 図録 軽井沢町の文化財. 信毎書籍印刷

Koyama T. 1955. Les diagnoses des Cyperacees nouvelles pour la flore de Japon. J. Jpn. Bot. 30: 129-137

Mizushima 1955. On two white-flowered forms. J. Jpn. Bot. 30: 94-95

長野県教育委員会編 1978. 長野県指定文化財調査報告第一集～第七集. 社団法人長野県文化財保護協会

大場秀章 2018. 原寛先生の生涯と軽井沢. 軽井沢町植物園紀要 2号: 1-28

信濃毎日新聞社編集局報道部 1969. しなの動植物記 304-305. 信濃毎日新聞社

佐藤邦雄先生 業績

佐藤先生が単著の場合は先生のお名前を省略した。

【著書・編書・監修】

1950 著 佐久の植物方言. 北佐久教育会

1957 著 浅間山群編 植物, 荒船山群編 植物. 佐藤貢編. 山なみを追うて 北信・東信編. 信濃山の会

1975 著 I 植物総論 第1章 環境と研究史、第2章 植物分布 佐久で発見された植物(原産植物)、II 植物と人生 第3章 植物と民俗 1 佐久の植物方言、3 年中行事と植物、4 好まれる木・嫌われる木、III 天然記念物、V 植物目録. 信州佐久の植物. 佐久教育会編. 佐久教育会

1976 著 カラー軽井沢の花. 信濃路

1978 著 カラー軽井沢の花 2. 信濃路

1978 編 軽井沢町植物園の薬用植物. 軽井沢町教育

委員会

- 1978 著 信州佐久の植物方言. 旅と信濃社
1992 著 II 植物のいとなみ 1 軽井沢の植物の概況、
2 開花植物の移り変わり、23 軽井沢町植物園、
軽井沢の自然. 中村浩志編. 信濃毎日新聞社
2005 著 軽井沢の花八〇年（聞き書き）. もう一度見
たい！軽井沢の草原・湿原. 軽井沢サクラソウ
会議編. 軽井沢サクラソウ会議
2005 監 軽井沢町植物園の花. 軽井沢町教育委員会
編集. ほおずき書籍株式会社
2007 監 軽井沢町植物園の花 第2集. 軽井沢町教
育委員会編集. ほおずき書籍株式会社

【共著】

- 1974 軽井沢の植物. 井上書店. 原 寛・佐藤邦雄・

黒沢幸子

- 1975 VI 佐久の植物研究者と文献. 信州佐久の植物.
佐久教育会編. 佐久教育会. 佐藤邦雄・草間
博
1983 軽井沢 花の図鑑. 信濃毎日新聞社. 佐藤邦雄・
田中豊雄
1987 第8章 植物. 軽井沢町誌 自然編. 軽井沢町
誌刊行委員会. 原 寛・佐藤邦雄

【論文】

- 1953 ネコとマタタビ. 信濃教育 794 : 58-60
1955 ヤドリギ. 信濃教育 820 : 61-64
1975 浅間山麓の保護すべき昆虫の生態. 佐久 34 :
1-5. 佐藤邦雄・小淵武一・土屋長久